

ファウスト第Ⅱ部 9345 行の nur の用法について

棄 原 草 子

はじめに

Voreilend ihren Tritten, laß beblümt/ An Teppich Teppiche sich wälzen; ihrem Tritt
Begegne sanfter Boden; ihrem Blick, /Nur Göttliche nicht blendend, höchster Glanz!
(Faust II. 9342-9345)¹⁾

筆者は、拙稿「Göttliche とヘーレナ」上・下²⁾に於いて、『ファウスト』第Ⅱ部 9342-9345 行について考察した。具体的には特に Göttliche の字義を考え、その字義に基づいて 9345 行の私訳を示した。私訳に於いて、Nur Göttliche は「神々に等しきもののみを」である。この Nur は、「ただ・のみ」の意で Göttliche 一語にかかるということは、Göttliche の字義が定まると同時に、自ずと知れてくることであって、その限りでは、この上ことさら 9345 行の nur について論ずる必要はないのである。だが、拙稿の上篇の冒頭に示したように、これまでの邦訳は、中島清訳ただ一例を除き、他の全てが Göttliche をヘーレナと取り、同時に、Nur Göttliche nicht blendend, という現在分詞句を、ihrem Blick (begegne) höchster Glanz! という要求文に対する「留保」を表す句として解釈した。即ち、9345 行の nur を「留保文を導く」語として読んだのである。しかし、今仮に Göttliche の解釈の如何を不問に付し、nur という不変化詞の一般的な用法からのみ見たとしても、この句の冒頭の nur を「留保」を表す nur として読むことは少し不自然ではないか、と筆者は考える。その所以を本稿に簡単に記しておきたい。

*

『ファウスト』9345 行の nur について考えるために、まず一般にゲーテとその前後の時代の nur の語義や用法はどのようなであったか、特に「留保」を表す nur の由来と用法を見ておくのが良いと思う。

1. nur の語源と形態について

最初に、グリムに拠って³⁾、副詞 nur の由来を簡単に振り返ってみることにする。そもそも、ドイツ語の nur は、ラテン語の nisi の言い換えに発する。ラテン語の nisi は、ne+si より成る接続詞で、その意は「(もし)・・・でないならば」あるいは、否定辞の後に用いられて「・・・を除いて」である。このラテン語が、古いドイツ語で、否定詞 ne と (e₃) si, あるいは否定詞 ne と (e₃) wære で表された。この ne と (e₃) wære の形が、後の nur の形の始まりであるという。

○es sei denn 「(もし)・・・でないなら」の系譜

まず、否定詞 *ni + sî* 即ち *ni sî* という形について見れば、これは偶然ラテン語の *nisi* と同音であり、古ザクセン語では、(it) *ne sî* であった。『ヘーリアント (救世主)』(121) に *ne sî* 「・・・でないなら」という用例がある。

Ic is engil bium,
Gabriel bium ic hêtan, the gio for goda standu,
anduuard for them alouualdon, ne sî that he me an is ârundi huarod
sendean uuillea. (*Heliand* 119-122)⁴⁾

現代ドイツ語に訳すと以下のようなものである。

Sein Engel bin ich, Gabriel bin ich geheißen,/ der ich vor Gott immer stehe, vor dem
Antlitz des Allwaltenden,/ wenn er mich nicht aussenden will mit seiner Botschaft.
(*Heliand* 2. Verkündigung Johannes des Täufers 120-122)⁵⁾

私は主の使い、/ガブリエルと呼ばれる者。常に神の御前に立ち、/唯一の支配者の御前に仕えて
おる。主の命を受けていずこかに/遣わされる時以外は。

(『ヘーリアント (救世主)』第2歌章 洗礼者ヨハネ誕生のお告げ 119-122 石川光庸訳)⁶⁾

古フリース語では、*ne se*、中低ドイツ語では、*ed ensî*、中高ドイツ語では、*e3 ensî*, *e3 ensî*
danne、新高ドイツ語では、*isz en sy dan* の形で用いられた。*isz en sy dan* の形から、否定詞 *en*
が脱落して、現在の *es sei denn* 「(もし)・・・でないなら」が生じた由である。

○es wäre denn 「(もし)・・・でないなら」の系譜

次に、否定詞 *ne* と (*e3*) *wære* の形について見れば、この形からは、後期古高ドイツ語の (*i3*)
nî wâri, *ne wâri*, *ne wære*、古ザクセン語の (it) *nî wâri*, *ne wâri* が生じた。『ヘーリアント
(救世主)』(205) に *ne wâri* (*nî uuâri*) という用例がある。

Thô fôrun thar uuise man,
snelle tesamne, thea suâsostun mêt,
uundrodun thes uuerkes, bihui it gio mahti giuuerðan sô,
that undar sô aldun tuêm ôdan uurði
barn an giburdeon, nî uuâri that it gibod godes
selbes uuâri: (*Heliand* 201-206)⁷⁾

現代ドイツ語に訳すと以下のようなものである。

Da kamen dort weise Leute zusammen in dem Saal,/die ihnen an Sippe die nächsten,
bewunderten dieses Werk,/wie solches je werden mochte, daß von zwei so Alten/gezeugt
werden könnte ein Sohn im Saale,/wenn es nicht selber Gott verheißen hatte.

(*Heliand* 3. Johannes des Täufers Geburt 202-206)⁸⁾

すると賢き男たちがやってきた、/勇敢なる者たち、同族の最も近い者たちが連れだって。/彼らはこの出来事に驚嘆していた。何ゆえ起こり得たのかと、/こんなに老いた二人の間に 子供が授かるということが、/母の胎内から、もしそれが神御自身の命令でないとしたら。

(『ヘーリアント (救世主)』第3歌章 洗礼者ヨハネの誕生 201-205 石川光庸訳)⁹⁾

古フリース語では, ne were, 中高ドイツ語では, e₃ enwære, e₃ newære となった。また, 否定詞が欠落して, e₃ wære となり, あるいは danne が加わって, e₃n wær dan の形が生じた。用例は, 『イーヴェイン』(1279) がある。

ez sehent wol alle die hinne sint:

e₃n wær dan cleine als ein mûs,

unz daz beslozen wær diz hûs,

sone möht niht lebendes drûz komen: (*Iwein* 1278-1281)¹⁰⁾

「この中にいるわれわれは皆, よく見える目を持っているからだ。/この建物が閉ざされていた間は, ネズミのように小さいものでないかぎり, /どんな生き物でも逃げ出すことはできなかったはずだ。」(『イーヴェイン』第二章 イーヴェインの「泉の冒険」 リンケ珠子訳)¹¹⁾

因みに e₃n wær dan の形から否定詞が欠落して, e₃ were dan となり, 更に現在の es wäre denn 「(もし)・・・でないなら」となった由である。

○nur の系譜

さて, グリムに拠ると nur の系譜は以下のようなものである。古ドイツ語の ne と (e₃) wære の形は, 古高ドイツ語で一語に縮合して niwâri, newâri となり, 12 世紀には, 更に縮まって niwâr, newâr, niwær となった。13 世紀には, アクセントが ni あるいは ne に移動して, niwer, newer, nüwer, nuwer となり, 更に, iw, uw は 融合して iu, û となった結果, niur, nûer の形が生じた。それから, 中世ドイツ語の「(もし)・・・でないなら」の意の副詞 nûr に発展したという。因みにクルーゲは, この推移の最後の段階を「n と, 母音化された w の間のアクセントのない e が落ちた」と説明している。¹²⁾

さて, 中世ドイツ語の nûr は, 新高ドイツ語の書き言葉に受け継がれ, 長音を h で表記して nuhr と記される。ただ, 初期新高ドイツ語および方言には, まだなお, より完全な形や, 更に引き伸ばした形や, 逆に, 短縮した形も見られるという。即ち, newer, neuer, nuer, neur, nor, nör, nar, nâr, na' 等の形の他に, n を付けた neuren, t を付けた nurent, neuert, neurt, nûrt, nurt, nort 等が見られる由である。

以上が, 主としてグリムによる nur の語源と形態についての解説の概略である。次に, その語義と用法を見てみよう。

II. nur の語義と用法

- 1) グリムがまず最初に挙げているのが、「先行する否定文あるいは肯定文の内容に関して、制限・対置・条件・留保を表わす nur」である。換言すれば, es sei denn, es wäre denn, mit ausnahme, ausser に当たると言う。

- a) 否定文が先行する場合の用例として、例えば次のような文が挙げられている。

ich lasse dich nit, nur du gesegnest mich. (1 Mos. 32, 26) 汝われを祝せずばさらしめずと
(『創世記』第三十二章二十六)13)

keiner kumt zu dem vatter, nur durch mich. (Joh. 14, 6) 我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし (『ヨハネ傳』第十四章六)14)

- b) 肯定文が先行する場合の用例として載せられているものから、いくつか挙げてみる。

Alles ist ruhig. Nur das Meer wallt etwas ungestüm. (Schiller: *Fiesko* 5, 1)15)

なにもかも静まりかえっている。ただ、海が幾分波立っているのを除いて。

(シラー:『フィエスコ』第五幕冒頭ト書)

○次は先行する肯定文が、命令文である例である。

Verschmähet meine Hand, verachtet mich,

Nur fliehet, nur rettet, rettet Euer Leben! (Schiller: *Turandot* Vierter Aufzug)16)

我が手を斥け、我を輕蔑するがよい、ただお逃げください、御身をお救いください！

(シラー:『トゥーランドット』第四幕)

○nur は強調されて nur aber となる場合もある。

Eduard schien ihr Beifall zu geben, nur aber, um einigen Aufschub zu suchen.

(Goethe: *Die Wahrverwandtschaften* Sechzehntes Kapitel)17)

エドゥアルトは彼女に同意を示すかに見えた、がそれは実は、少々時間稼ぎをしようとしてのことであった。(ゲーテ:『親和力』第十六章)

- c) 先行する否定文あるいは肯定文に対する制限は、nur dasz によっても表現される。

Was säumt ihr? Fort! der Wimpel weht;

Nach Rom, dafs euern Bund der heil'ge Vater kröne!

Nur dafs der süßen verbotenen Frucht

Euch ja nicht vor der Zeit gelüste! (Wieland: *Oberon* Erster Gesang 2.3)18)

なにを躊躇う？ 翻る旗のもと、進めローマへ 聖なる父より勝利の冠を戴くのだ！

ただ、時至らぬうちに性急に甘い禁断の果実を求めることのないように！

(ヴィーラント:『オーベロン』第一歌 2.3.)

○また、前文に加えられる制限が、遺憾の意を伴う場合、遺憾の意を明示する形として nur schade dasz (・・・ただ残念なことに) の形も挙げられている。

以上が、先行する文の内容に関して制限・対置・条件・留保を表わす *nur* の語義・用法の概略である。

*

ここで、制限・対置・条件・留保を表わす *nur* の用法について念のためハイネの記述も瞥見しておきたい。¹⁹⁾ *ni wære, ne wære, ni wâri* から, *niwer, newer, nüwer, niur, neur, nuor, nûr* 等を経て *nur* に至った形態の変化についてはハイネもグリムと同様の説明を行っている。そして、その用法について、「まず、制限を加える後置文を導く」用法が生じたと明記している。その例として、グリムと同様に、『ヘーリアント』205 行の *ni wâri* を挙げている。更に、この *ni wâri* や *ne wære* の用法から、間もなく、「先行する文を、後続する文ないし分枝によって制限する」*nur* の一般的用法が生じたと記し、多くの例文を示している。その中から、前後を補って一例を挙げておきたい。

Mittelgut, wie wir,

Find't sich hingegen überall in Menge.

Nur muß der eine nicht den andern mäkeln.

Nur muß der Knorr den Knuppen hübsch vertragen.

Nur muß ein Gipfelchen sich nicht vermessen,

Daß es allein der Erde nicht entschossen. (Lessing: *Nathan* 2, 5)²⁰⁾

それとは反対に私たちのような中くらいの人間は、/どこにも沢山います。/ただ、お互いにあ
ら捜しをしてはいけないのです。/木の瘤は木の瘤どおし、仲良くやっていたかねばならないのです。
/木の梢が、自分だけは地面から生えているのではないなどと/思い上がってはいけないのです。

(レッシング:『賢者ナータン』第二幕第五場)

2) グリムは、次いで、*nur* の語義・用法として「他のすべてを排除して、ある特定の何かに制限することを表わす *nur*」を挙げている。これは、言い換えれば *niemand als, nichts als, nichts weiter, nichts mehr als, bloß, allein* に当たる *nur* であり、グリムはその用法を細かく分類し、各々に豊富な用例を示している。簡単に言えば「ただ・・・のみ」の意で用いられる *nur* で、これは現在の *nur* の用法と格別大きな違いはないように思われる。そこで、紙幅の関係もありここに用例を引用することは控えるが、グリムの記載に於ける分類を示しておく以下のようなものである。

a) まず最初に挙げられているのは、*einzig und allein darum, aus keinem andern grunde* の意で、ある特定の理由・根拠への限定を表わす *nur dasz (damit,um), nur weil* である。*nur* が後置される場合もある、としてその用例も示している。

b) 次に、非常に多くの用例が挙げられているのが、特定の文枝にかかって、限定の意を表わす *nur* である。通常、その文枝の前に置かれる。グリムは、更にその文枝の種類別に分類して、それぞれに用例を整理し示している。文枝の種類別の *nur* の用例分類を示しておく、以下のようになる。

α) 主語あるいは述語にかかる場合。主語あるいは述語にかかる *nur* は、当該の主語あるいは

述語の後に置かれることもある、としてその用例も挙げている。β) 目的語にかかる場合。目的語にかかる *nur* も、後置される場合がある、としてその用例も挙げている。γ) 2格あるいは3格にかかる場合。δ) 前置詞句にかかる場合。前置詞句にかかる *nur* も後置される場合がある、としてその用例も挙げている。ε) 形容詞、分詞あるいは所有冠詞にかかる場合。ζ) 副詞あるいは副詞的表現にかかる場合。η) 数詞あるいは数概念を表わす言葉にかかる場合。θ) 動詞そのものにかかる場合。

グリムは、更に *nur* の用法として、以下のものを挙げている。3) *nicht (kein)~, nur; nicht nur~, sondern (als) auch* などの対立的対置、相関的副詞としての用法。4) *nichts als, allein, blosz* に同語反復的に加えて強調に用いる用法。5) 「制限」の意は弱まり、ただ強調、一般化のために用いる用法。他にも、グリムの時代にすでに、古くなった用法を三つ指摘し、加えて「時間的な意味で用いられる」*nur* は、見出し語を改めて掲げて、特別に取り上げている。グリムは、それぞれに用例を示して詳述しているが、ただ、用法3) 以下は、本稿の議論に直接の影響はないと思われるので、ここでは、これ以上の紹介は、割愛することにする。

*

以上に *nur* の語源と形態、およびゲーテの時代の *nur* の語義と用法を主としてグリムに拠って概観した。ここで改めて、『ファウスト』9345行の *nur* に目を向けて見よう。

III. 『ファウスト』9345行の *nur*

既に指摘したように、従来の邦訳の殆どは *ihrem Blick, /Nur Göttliche nicht blendend, höchster Glanz!* というファウストの台詞中、現在分詞句冒頭の *Nur* を「留保文を導く」語として読んだ。そこで、例えば次のような訳文となった。「お目をその輝く色彩でお迎えするのだ。ただこの神々しい方がかりにもまぶしい思いをなさらぬように気をくばるのだぞ。(手塚富雄訳)」²¹⁾ 或いはまた、「神々しいお妃がまぶしくお思いなさらぬ程度に、 /この上ないうつくしい光と色が、用意されねばならぬ。(大山定一訳)」²²⁾ 等。

邦訳にあらわれた言い回しは異なるが、いずれの訳者も、『ファウスト』9345行の *nur* をグリムの記述した *nur* の用法の1)「先行する否定文あるいは肯定文の内容に関して、制限・対置・条件・留保を表わす *nur*」として読んだ。詳細に言えば、1) の b) 肯定文が先行する場合、しかもその肯定文が要求文(命令文)である場合として読んだわけである。その読み方は適当なのか。

ここで筆者は、「先行する否定文あるいは肯定文の内容に関して、・・・」というグリムの記述中の一語「先行する・・・」に注目したい。この語は、用法1) に属する a) b) c) いずれの用例引用に際しても、その都度繰り返して述べられている。また、上に触れたように、ハイネも「制限を表す」*nur* の用法について、「制限を加える後置文を導く・・・」「先行する文を、後続する文ないし分枝によって制限する」と実にあっさり記している。また、プファイファーのドイツ語源辞典には「*nur* は、接続詞的に用いられて、先行する文の内容を制限する発言を導く」とある。²³⁾ グリムやハイネなどの記述を素直に読み限り「否定文あるいは肯定文の内容に関して、制限・対置・条件・留保を表わす *nur*」には、当の否定文あるいは肯定文が「先行する」ことは、自明のことと読み取れる。常識的に

考えてみても、或ることが、まず述べられて、その内容に、後から制限・対置・条件・留保が加えられるというのは、ごく自然な順序であり、その「但し書き」を導くのが nur であると考えるのが妥当であろう。

さて, ihrem Blick, /Nur Göttliche nicht blendend, höchster Glanz! というファウストの台詞において、「要求文に対する留保を表す」と解釈された Nur には、果たして要求文が先行しているだろうか。この台詞に省略されている動詞 begegne を補って ihrem Blick (begegne), /Nur Göttliche nicht blendend, höchster Glanz! として考えてみよう。確かに、要求文の一部 ihrem Blick (begegne), が前にあるので、形式的には、不完全ながら先行していると言えよう。しかし、内容的には、必ずしも「先行している」とは言い難いのではないか。というのも、例えば「お目をその輝く色彩でお迎えするのだ。ただこの神々しい方がかりにもまぶしい思いをなさらぬように気をくばるのだぞ。(手塚富雄訳)」という邦訳の読み方に於いて、留保が加えられる肝心の内容は、まさに höchster Glanz「最高の輝き」である。Nur があとから留保を加える nur であるなら、なんとしてもまず höchster Glanz「最高の輝き」いう肝心の「内容」が先行しなければならないのではないか。グリムの説く用法に従えば、是非とも ihrem Blick, höchster Glanz,/Nur Göttliche nicht blendend, とならねばならないところではあるまいか。

以上を要するに、留保が加えられるべき内容の核心である句 höchster Glanz が、nur に先行していないという点で、9345 行の nur を「留保文を導く」語として読むことは、nur の用法それ自体から見て、不自然である、というのが筆者の見解である。因みに、筆者の解釈では、9345 行の nur は、グリムの用法分類では 2) の b) の β) ということになる。他に自然な読み方があるとき、それを捨てて、敢えて不自然な解釈を取る必要はないと思う。(了)

主要参照辞書

Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm. Siebenter Band. Verlag von S. Hirzel. Leipzig, 1889. dtv. München, 1984

Deutsches Wörterbuch von Moriz Heyne. Zweiter Band. Zweite Auflage. Verlag von S. Hirzel. Leipzig, 1906

註

- 1) Johann Wolfgang von Goethe: Faust Eine Tragödie, Insel Goethe Werkausgabe Band 3. Insel Verlag. Frankfurt am Main, 1970 265 頁
- 2) 『学苑』731 号, 789 号参照。
- 3) 「I. nur の語源と形態について」と「II. nur の語義と用法」は主として、上掲グリム辞書 998~1008 頁に拠る。グリムが引用している用例の中から、幾つかの用例を選び、またハイネが引用している用例の中から一例を選んで本稿に採録したが、採録に際しては、筆者の判断により必要に応じて、テキストの前後を補ったものがある。また、正書法は、原則として筆者が引用した原書の正書法に従った。一例を挙げれば、グリムの表記は、名詞小書であるが、本稿での引用は、参照した原書の正書法に従っている。引用原文および訳文中の下線は筆者による。
- 4) *Der Heliand* Studienausgabe in Auswahl herausgegeben von Burkhard Taeger. Max Niemeyer Verlag. Tübingen, 1984 9 頁 下線は筆者による。
- 5) HELIAND und die Bruchstücke der Genesis. Aus dem Altsächsischen und Angelsächsischen

- übertragen von Felix Genzmer. Reclam. Stuttgart, 1964 20 頁 下線は筆者による。
- 6) 石川光庸訳・著『古ザクセン語 ヘーリアント (救世主)』大学書林 東京 平成 14 年 97 頁 歌章名、行替表示および下線は筆者による。
- 7) *Der Heliand* Studienausgabe in Auswahl herausgegeben von Burkhard Taeger. Max Niemeyer Verlag. Tübingen, 1984 12 頁 下線は筆者による。
- 8) HELIAND und die Bruchstücke der Genesis. Aus dem Altsächsischen und Angelsächsischen übertragen von Felix Genzmer. Reclam. Stuttgart, 1964 22 頁 下線は筆者による。
- 9) 石川光庸訳・著『古ザクセン語 ヘーリアント (救世主)』大学書林 東京 平成 14 年 123 頁 歌章名、行替表示および下線は筆者による。
- 10) Hartmann von Aue: IWEIN Textausgabe Walter de Gruyter & Co.. Berlin, 1968 31 頁 下線は筆者による。
- 11) 『ハルトマン作品集』郁文堂 東京 昭和 57 年 287 頁 下線は筆者による。
- 12) Friedrich Kluge: *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache*. Erste Auflage bearbeitet von Alfred Götze. Walter de Gruyter & Co.. Berlin und Leipzig, 1934 421 頁
- 13) 原文は、グリム掲載の正書法のまま引用した。邦訳は以下の書に拠る。『舊新約聖書』日本聖書協会 東京 1975 原文および邦訳中の下線は筆者による。
- 14) 原文は、グリム掲載の正書法のまま引用した。邦訳は以下の書に拠る。『舊新約聖書』日本聖書協会 東京 1975 原文および邦訳中の下線は筆者による。
- 15) Friedrich Schiller: *Gesammelte Werke in fünf Bänden*. Herausgegeben von Reinhold Netolitzky. Erster Band. Dramatische Dichtungen I. Sigbert Mohn Verlag. 262 頁 下線は筆者による。
- 16) Friedrich Schiller: *Gesammelte Werke in fünf Bänden*. Herausgegeben von Reinhold Netolitzky. Dritter Band. Dramatische Dichtungen III. Gedichte. Sigbert Mohn Verlag. 290 頁 下線は筆者による。
- 17) Johann Wolfgang von Goethe: Berliner Ausgabe 12. Poetische Werke. Romane und Erzählungen IV. Aufbau-Verlag. Berlin, 1963 116 頁 下線は筆者による。
- 18) Christoph Martin Wieland: SÄMMTLICHE WERKE Zwey und Zwanzigster Band. OBERON Erster Theil. Bey Georg Joachim Göschen. Leipzig, 1796 4 頁 (復刻版 C. M. Wieland: Sämmtliche Werke VII. Band 22. Herausgegeben von der Hamburger Stiftung zur Förderung von Wissenschaft und Kultur in Zusammenarbeit mit dem Wieland-Archiv, Biberach/Riß, und Dr. Hans Radspieler, Neu-Ulm. Hamburg, 1984.) 下線は筆者による。
- 19) 上掲ハイネ辞書 1027~1028 頁に拠る。
- 20) Gotthold Ephraim Lessing: *Lessings Werke*. Herausgegeben von Kurt Wölfel. Erster Band. Gedichte · Fabeln · Dramen. Insel Verlag. Frankfurt am Main, 1967 510 頁 下線は筆者による。
- 21) ゲーテ『ファウスト』第二部 (下) 手塚富雄訳 昭和 50 年〈中公文庫〉67 頁。訳文中の下線は筆者による。
- 22) ゲーテ『ファウスト』大山定一訳 昭和 46 年 人文書院 281 頁。訳文中の下線は筆者による。
- 23) *Etymologisches Wörterbuch des Deutschen*. Erarbeitet von einem Autorenkollektiv des Zentralinstituts für Sprachwissenschaft unter der Leitung von Wolfgang Pfeifer. H-P. Akademie-Verlag. Berlin, 1989 1184 頁

(くわばら かやこ 総合教育センター)